

本会第一回大会記事並びに研究発表要旨

第一回大会は、去る十月二十日日本学文理学部に於いて左の通り開催された。

。総会・懇談会 十二時～午後二時 於会議室
会務報告・会計報告が行われ、議事終了後懇談会にうつった。本学副学教授ほか各教官・会員諸氏より、御慶賀御激励の言葉を受けた。
。研究発表会 於十一・十二審教室

午前九時～十二時、午後二時～四時
発表者及出席者は以下の通りであるが、諸氏の発表に対し活発な質疑がなされた。以下、諸氏の発表要旨を要約順に従って掲載する。

発表要旨

奈良時代前半の地名政策の初期に於ける

地名改正の過程について

佐藤 仁

(一) 奈良時代前半の地名政策の一つに地名を好字化、二字化が挙げられる。これについては今日迄、あまり研究が進められて居らず、一般に和銅六年風土記撰進の詔と共に本され、施行されたものと考えられている。しかしこの事業は決して一巻に

爲されたものではないと思われる。

(三) まず和銅六年の詔を見ると

五月甲子、制。畿内七道諸國郡郷名並^ハ好字^ヲ。

とあり、これより

(イ) この詔で地名改正が國郡里、三者に亘ったが、

又は諸國の郡里に行われたと解すべきか。

(ロ) 好字とのみあるが、二字化は行われたか。

の二問題がある。前については

(ハ) 和銅五年以前のものと考えられる賦役令集解

調庸物條古記附改民部省式の國名と、和名抄、

延喜民部式國名書法のはゞ一致する事

(ニ) 和銅六年以前に國名の一字、三字より二字へ

の変化、好字化のある事

(三) 大宝二年の戸籍に於ては郡に好字化が及ばぬ

事

(四) 紹初の読み方の妥当性

等より、この際は郡里のみ改正が爲され、國はそれ以前に好字化、二字化が行われ、和銅六年には、はゞ完了していたのではないかと考えられる。

(五) 好字、二字両令が同時に否かについては、當

代資料分析の結果、両者が同時に出されたと結論する事が可能である。

(四) さて和銅六年には郡里の好、二字化が爲されたが、里については必ずしも良く行われなかった事が、古風土記郡里名を考察する事により判明する。かくて神龜三年郷(里)に対する改正の民部省口宣が出た、と考えられる。

(五) 地名の好字化、二字化の過程はこの様に、和銅六年以前に國が、和銅六年には郡里——主として郡が、神龜三年には郷(里)の如く、三段階に分かれて行われ、しかも籍年と関連し、その前年に実行されたと結論したい。

——柴田女子高等学校教諭——

藏入式の成立年代について

小田川 匡男

藏入式の成立年代については、吉村茂樹氏が藏入式についての一考察の中で、寛平二年式と天曆式の他、眞首抄の「寛平六年藏入式云」とある史料を引用して「寛平六年藏入式が寛平二年の橘

廣相所撰の藏入式に対する改補の目的をもって現
 めれた」とされている。しかし「寛平六年藏入式
 云」という言葉は實首抄ばかりではなくて前田家
 本西宮記にもあり、西宮記ではその次に左大弁橘
 廣相撰とある。然るに橘廣相は寛平二年五月十六
 日に死んでゐるから、橘廣相撰と寛平六年撰は互
 いに矛盾する。また西宮記、侍中群要、實首抄に
 引用された藏入式逸文の異同を検討すれば

西宮記	六年亦召仰	除目、 ^六 簡詩杖戯言愚
侍中群要	二年則召仰而 ^六 愚	除目、 ^六 簡詩杖戯言愚
實首抄	六年亦召	除目、 ^六 簡詩杖戯言愚

となつて、除目、簡とあるべき所を西宮記と共に除
 目、簡と誤っている實首抄が前田家本西宮記の系統
 にあることは明かである。更に寛平二年式と六年
 式は言葉の末梢における若干の異同とぞあれ、原
 文を全く同文と見て良いことは一五。字中一四。
 字まで重複している事実からも判断される。

以上によつて寛平六年藏入式の存在は否定でき
 たであらう。これを裏づけるものとしては、北山

抄に「藏入式」と「藏入舊式」がある。即ちとり
 たてゝ年号を付すこともなく單に藏入舊式とのみ
 記すことは、藏入式に新式と旧式の二種類ののみが
 あつたことを傍証するであらう。

さて今日現存する藏入式の逸文は寛平式である
 か、天曆式であるか。例えば侍中群要オニ所引藏
 入式抄やオ九所引式には別当大臣なる語が見える
 が、藏入所別当が設置されたのは寛平九年以後で
 あるし、侍中群要オニ所引式には實首抄所引天曆
 式と全く同文のものさえ見えるから、侍中群要の
 場合たゞ藏入式であるのは天曆式のことであり、
 寛平式の場合はゆきゆき寛平と断つて而もその序
 文しか伝つていない。この事は後世広く通用した
 藏入式が天曆式であつたことを示している。これ
 までに私が確認できた寛平式の本文は北山抄に引
 用された藏入旧式のみである。

——青森県立弘前高等学校教諭——

先史時代における農耕と

国書館式文化

行 上 久

最近における考古学研究の発達は目覚しく、わが国にも旧石器時代があったことが明らかになった。その結果、今まではこの国に人類が住みはじめたのは新石器時代で、その人々が作った文化は縄文・式土器文化であるという考えは是正されることになった。これに伴って、わが国の農耕の起原についても多くの疑問が持たれるに至った。従来の考え方によれば縄文・式土器文化の時代には狩猟・漁撈を中心とした生活で農耕を欠き、人々は移住して定まった住居はなかったことになっている。

しかし津軽地方の円筒式下層（前期）の遺跡には明らかに竪穴式住居址があり、また円筒式上層（中期）のごく初め頃の遺跡と認められる青森市三内からは打製の石包丁様の石器が出土している。その上、円筒式下層・上層の遺跡からは石皿、すり石が多く出土している。したがって津軽地方の縄文式前期・中期の時代は移住生活ではなくして、とち・くるみを石皿ですりつぶし、またひえ・あめの類を栽培して石包丁で穂先だけ刈取るという定住生活が行われていたと思う。北海道のアイヌ

や本県南部地方では、貝殻を用いて穀物の穂先だけ刈取る風習があるが、津軽地方の縄文式土器文化のうち、円筒式の時代だけが特に長く続き、北海道文化の影響を強く受けていたと考えられる。

次に米作の問題であるが、津軽地方の米作はその起原が全く不明である。一般に米作を証明するものとしては、土器に附着している籾跡・炭化米・農具の三つがあり、この中の一つを欠いても確実な米作があったとは云い難い。豊前田舎館式土器に籾跡があり、弥生式土器に類似していることから、これを津軽地方の弥生式文化及び米作の起原であると説く人もあるが、田舎館から農具視される石器の発見がないので私としては縄文文化の文化期と考えたい。炭化米が発見されていて米作が全く行われていない例として、碓氷川遺跡があるからである。

—青森市立中央高等学校教諭—

田舎館遺跡

工 藤 正

I 田舎館式土器の現在迄の考古学的位置

これについては、昭和二十五年に東北大学伊東信雄氏によつて学会に紹介された。即ち、弥生式土器との関係では、東北南部の影響を受けていること、蓋形土器があること、低湿遺跡であることなどから、弥生式と推定された。たゞ稲作については全く資料が無く不明であつた。現在迄の学説では米作の根拠がないから続縄文と位置づけられている。

II 田舎館遺跡の立地条件

- (1) 低湿遺跡 浅瀬石川の変動による河床跡が小川堰や低湿や沼地帯として、五ヶ所にその流跡が見られる。この低湿の北側の小高い地帯に分布されている。へ大字田舎館字東田は七万歩位、大字並柳字大田は一万五千歩位。

- (2) 包含層 地表下五〇層内外、黒灰土層に包含、火事跡と見られる黒灰層が一面にある。堅灰状のもの、ニセ硝に見られる。(へ水路斷層面に)

III 田舎館遺跡の副遺物(昭三一・一二・三二・五)

- (1) 初江原 漆部更土器へ口頸縁十陵と六陵に九個の片、破片に四個。何れも磨消縄文泥線

文あり。

- (2) 焼米 破片と共に焼米出土。又石器破片も出土。焼米は全部で十五、六個発見。糊圧痕焼米破片共に、三二年四月六日伊東教授学会に発表。
- (3) 蓋形土器 円板状一個、孔は二孔。四形状三個、二対四孔。破片四形状のもの三個。
- (4) 高坏部と口頸部の孔 高坏部には孔が二〜四個、十数個の高坏部発見。蓋形土器の口頸部に孔が二対四孔、三個の土器に見られる。
- (5) 自然物 くるみ、どち、樹皮、十数個の実。
- (6) 石器 石鏃(黒耀石)破片一、石鏃一、破片三。
- (7) 土器破片 田舎館式土器、りんご箱に四杯、他に縄文式土器二。
- (8) 塗装 彩色は沈線部、内部の塗装が多い。


IV 考察

- (1) 縄文式土器の影響と思われる点

a. 大洞式式の工字異形、斜走文様と磨消縄文の太い沈線などの施法

b. 大洞c、日の曲線的施文、又、半月象文

など。又は柱之内正式か。

C、縄文後期の手法かと思われる形の後期らしいもの二点出土。口頸部四稜のもの、施文に  の粗形らしいものが見られる。本土品に短頸や、六・十稜の深鉢が見られる。へこれは弥生式にもあるので直接の影響か否かは不明）
d、はりつけ縄文が多数見られる。

(2) 弥生式土器の影響と思はれるもの

a、天王山式や櫛形屈式の影響へ（東北地方南部）
b、関東の須和田式土器へ（神奈川県奥平村出土）
や竜見式の影響

c、若手泉水沢出土の土器と全く類似している。

d、孔や蓋、又高坏部に弥生式の影響顕著

(3) 整理

a、古いものとしては、太い磨消縄文の沈線、は
つりつ縄文、斜走文様等を主体とする。遺物
の三分の一位。

b、発展したものとしては、沈線が細線となり連
続山形文、連弧文、平行沈線等を主体とする。

c、その他、土偶や不製品は発見されていない。

d、田舎館式土器は弥生式と縄文式との影響が非常に強く見られる。稲作についての資料は完全ではないが確信を持てると思う。

へ本遺跡については伊東氏が結論を発表されること、思う。）

——青森県田舎館中学校教諭——

孔井貢の学統に関する一考察

千葉 良一

孔井貢は申すまでもなく津輕の生んだ特異な思想家である。彼の学統に関する先人の研究は未見であるが、その学統に関して、はつきりしないといわれている。この点に關じて考察してみた。

彼の学問の立場を論じた著書について見るに、「五蟲論」の序に於て、「夫吾が夫子（素行）は仲尼を以て師とし、日用日新是を天地に学ぶと曰へり、吾亦夫子を師とすること年有り、夫子没して後、吾是を天に考へ敢て形名に不付す」とのべている事實、又「志学幼辨」の中で「然々先聖没後三千余歳ノ間ヲ觀ルニ聖人ヲ知ル者異朝ニハ蓋

子孫子の兩子ノミ、吾カ朝ニハ素行子、徂来子大宰純ノ三子ノミ」とのべていることは、彼の思想の立場が古学派に同調するものであることがわかる。しかして、特に素行に対する敬愛、私叔がそこにあるように感じられるのである。津輕藩に於ける素行学への帰依は、四代信政が素行に対して師礼をとつて以来、その縁者、子弟の多数が藩士として津輕藩に仕えている事実にも明かである。そしてその伝統的環境の中—弘前—で成長した貢も々の学問の影響を受け及至はその学習につとめた事実を想像することができると思う。貢自身の思想—儒学に対する理解は、素行的思惟方法を継承しているかの如くである。即ち「当代武士階級の困窮は眞の聖学を忘れ朱程の心上理学に従う所より生じている。それ故に我らはこれを廃して、君は治道の学を志し、臣は士人として格物致知の実学を志し、治道に意を用い誠意正心天下日用のことにつとめるべきである」とする。この思惟は素行の「唯学向は致知格物に不可_レ出也凡そ天子、武將の学は天下國家に用所なきことにはしはらく

も心を留め結ぶべきことにあらざる也」の聖人之学、皆在_レ務実、実足_レ淺近日用持物_レ巡_レ環之間敵將去也」と傾向を同じものと考えられる。貢が自身で明言している事実、また彼をとりまく環境的事実、そして、その思惟傾向を同じくする矣に於て、貢は素行の思想を継承していると考えてよいのではあるまいか。

—青森県相内中学校教諭—

土地売渡手形の分類について

成 田 稔

近世に於ける土地売渡手形は之を實質的意義に解すれば、不動産担保借用手形即ち不動産抵当借用手形・不動産質借用手形と土地売渡手形へ形式的意義に於ける—及び替地手形並に譲渡手形の四種となる。

不動産担保による借銀は多くの場合担保流れとなり、土地は債権者の所有に歸したし、替地は多くの場合上納金等に充当するため上錢を受取つてなされる事が多かったし、譲渡も有償の場合も相

当多く存在したからである。

しかし、土地売買は土地永代売買禁止令の存在にも不拘半公然となされた地方が多く、南部領内にも土地売渡手形が多数残っている。之を形式的土地売渡手形と名付ける。形式的土地売渡手形は、土地収奪を防止せんとする農民の意志の強弱を基準として分かれ、その意志の強いものから次々に弱まっていく順序に従つて排列すると次の如くなる。

一、有合貸地売渡手形

二、貸地売渡手形

三、条件付永代売渡手形

四、永代売渡手形

一は筆叢の新発見に係るもので、期限を定めず土地を貸地に売渡し、元錢返却により何時でも之を取戻せる事を約したものであり、売渡手形ではあるが売ったのではなく貸してあるんだと云う意欲が強く現われて居り、むしろ借用手形に近い。二は年季売渡手形の事であり期限を限つて売却し、期限到来せば元錢にて買戻しうるものである。三、

になるともう永代売渡手形の一つとなるが、永代売渡手形の効力発生を、一定の条件の達成により留保せんとするものであり、四は無条件の永代売渡手形であり土地収奪を防止せんとする売主の意欲は全く見られない。これら四種の形式的土地売渡手形は夫々細分されるが、最も多く用いられた形式は四であり、二が次に次ぎ三がそれに続き一が最も少ない。土地が容易に収奪されていった事を示す一つの証左である。

——弘前大学野辺地分校講師——

津軽藩候とギリシタン

石戸谷 正司

——弘前市立三中学校教諭——

（後日論文として本誌掲載の予定につき省略）

「国民之友」考

稲 葉 克 夫

明治思想史四十五年の流れは大別して次の三期に分けられると思う。

前期は所謂文明開化期である。中期は、直接には明治二十年の鹿鳴館流の欧化主義に反対し、井上案、大隈案の条約改正を攻撃することゝ立ち上つた雑誌「日本人」・新聞「日本」に代表された国民主義と、明治初期の啓蒙主義や十年代の英・仏直訳的自由民権思想を受け継ぎ、キリスト教の影響を受け更に新興資本家階級の要求をくみ入れ、市民階級の代弁をなした徳富蘇峰の「国民之友」や「国民新聞」などが対立した、日本のナショナリズムの最も昂揚した時期であつた。後期は、日清戦争の勝利を背景にして第一次産業革命を以てした日本資本主義の變貌から由來して、帝國主義と社会主義の兩極にそれそれの思想が強く牽引されて行つた時期である。

私は、この明治思想史の中期に平民主義を標榜して政治的には藩閥政府を攻撃し、経済的にはマンチエスター派の自由主義經濟を唱え、文化的には下からの欧化主義の立場をとり、文学面においては二葉亭や道隆、鴎外、紅葉、露伴、速谷、一葉にその活動の舞台を与え、更に「平民新聞」

によつて日本の社会党の思入なりといわれ、幸徳や西川等に社会主義の洗礼を与えたといわれる「国民之友」に、少しく考察の目を向けてみたいと思ふ。

考察の問題点は次の諸点である。

①「国民之友」の指導理念、こゝでは蘇峰の思想も問題となつてくる。

②平民主義とその思想的系譜、並びに地盤

③誌上に窺われる二十年代の指導的思想家の概観

④「国民之友」の及ぼせる影響

海外紹介記事とか条約改正問題も関連してくる。
——青森県尾上中学校教諭——